

令和元年6月5日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02902

研究課題名(和文) 朝鮮史における「モンゴル時代」の意義に関する王権論的研究

研究課題名(英文) The Korean Kingship in the Mongolian Era

研究代表者

森平 雅彦 (Morihiro, Masahiko)

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：50345245

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、13～14世紀の事元期(モンゴル服属期)における高麗王権の存立形態を、王位継承問題の発生メカニズム、君臣関係の構造変化、官人集団の統御、国王近侍集団の形成という4つの観点から分析した。これにより、少数専制と官僚ポストの獲得競争を基調とする武臣政権期以来の政治潮流が、事元期においてもモンゴルの影響のもとで形を変えて継承、増幅されていたこと。その傾向は、高麗の国家機構が元来「中央ユーラシア的」要素を内包していたことによっても促進されたこと。しかしそれは結果的に王権の求心力低下をもたらした、高麗末・朝鮮初期の改革課題となること、が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

- (1) 事元期高麗にみられるモンゴルの影響について、朝鮮内部社会の既存の潮流との同調・共鳴現象を確認したことで、「特異な時代」とされがちな事元期を、高麗時代から朝鮮時代にかけての中・長期的な連続性のなかに捉えることが可能になった。
- (2) 高麗の既存のシステムのなかに北方遊牧民国家の制度・慣習と親和性をもつ要素を確認したことで、朝鮮社会を「中央ユーラシア」の視点から捉える視座が得られた。
- (3) ユーラシア諸地域における「モンゴル時代」の意義を評価する足がかりの一つとして、朝鮮を素材とするモデルを提供することが可能になった。

研究成果の概要(英文)： In this study, the researcher analyzed the existence of kingship of the Goryeo dynasty under the Mongol domination from 13th century to 14th century, especially from the following perspectives. 1) the outbreak mechanism of succession dispute; 2) the structural change of the relationship between sovereign and subject; 3) the control over officials; 4) the formation of king's attendants.

The political trend from the era of military rule, which despotism and competition for bureaucratic post characterized, even continued and was amplified under the Mongol domination with some changes influenced by Mongol. This trend was also accelerated by the "Central Eurasian" character of bureaucracy, which the Goryeo dynasty originally had had. But as a result, this trend weakened the unifying power of the king of Goryeo. The reformers in the late Goryeo period and the early Joseon period aimed to resolve this political weakness of the kingship.

研究分野：歴史学

キーワード：朝鮮史 高麗 モンゴル帝国 モンゴル時代 王権論

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

報告者は長年にわたり、13世紀後半～14世紀半ばに展開された高麗・モンゴル関係史を探究してきた。従来の関心は主として国家間関係の制度的構造にあり、その成果は2013年度に科研費：研究成果公開促進費をうけ、研究書『モンゴル覇権下の高麗：帝国秩序と王国の対応』（名古屋：名古屋大学出版会、2013年）として公開している。本研究は、以上の成果を土台として、朝鮮中世・近世史の長期的展開過程における「モンゴル時代」の位置づけというテーマにとりくんだものである。

戦後／解放後、朝鮮史研究の主流をなす南北朝鮮の学界では、戦前以来の他律性史観に対する批判という意味を含むにせよ、その民族主義的ないし一国的傾向から、異民族支配にともなう影響を、あるべき歴史の「ねじ曲げ」と見なしがちであった。しかし報告者がこれまでの研究から得られた感触として、モンゴルの影響は単なる外からの「強制」にとどまらず、朝鮮内部社会の既存の潮流と同調・共鳴現象を起こした形跡がうかがわれた。すなわち、モンゴル服属期（以下、事元期）は、11世紀までに整備された高麗の古典的体制が15世紀までに朝鮮朝の新たな古典的体制へと推移する長期的変動のなかで重要な位置を占めると考えられる。

したがって、モンゴルとの関わりを適正に評価することは、朝鮮中世・近世史（高麗・朝鮮時代）の流れを総合的に理解するうえでも不可欠な論点となる。しかもそれは北方遊牧民政権に由来する制度・文化に対する高麗社会の反応を探るものでもあるため、一般に中国風の王朝と理解されている朝鮮前近代国家の隠された側面をあぶりだす「試薬」として、従来にはない分析視角を提起することになる。同時にそれは、他律性史観を克服しつつも外在的条件を朝鮮史の体系的理解に適正に組み込むという朝鮮史全体の課題にむきあうものともなる。

他方、13～14世紀のユーラシアを席卷したモンゴル帝国が政治・経済・文化など多方面にわたり世界史的な画期性を有することは、岡田英弘や杉山正明の提唱以来、一定の認知をうけて久しい。しかしこれはなお大枠論というべきである。当時モンゴルの影響をうけた地域ごとにその個性に留意しつつ実態を解明し、各地域史のなかに「モンゴル時代」を体系的に位置づけ、それらを積み上げてモンゴル帝国の総体的な歴史的意義を再構成する作業が必要となるが、それは必ずしも十分に進捗していない。

以上のように本研究は、「特異な時代」として等閑視されてきた事元期を朝鮮史の体系のなかに位置づけ、それにより朝鮮前近代社会の一面を新たな視点から別括し、ひいては朝鮮史から「モンゴル時代」の世界史的意義を実証的に解明する足がかりを提供することを動機とする。

2. 研究の目的

如上の背景のもと、本研究では一義的課題として、王朝国家とその社会を理解するうえで第一の前提となる王権論に主眼をおいた。すなわち、事元期高麗王権の歴史的品格を、モンゴルとの連動・同調・共鳴関係のなかで捉え、これを高麗・朝鮮両時代にまたがる長期的展開のなかに位置づけることを試みた。そのための具体的な検討項目として、下記(1)～(4)の4つのテーマについて分析をおこなった。

(1) 王位継承問題——紛争発生メカニズム

事元期には現役の国王と、引退した前王、王世子、あるいは傍系王族との間で王位継承紛争が頻発し、これにともない官人間の分派党争が展開された。その過程では多くの場面でモンゴル側の介入、関与がみられた。しかし当時はモンゴル側でも帝位をめぐる権力闘争が頻発しており、高麗の政争はこれと同時に並行して生起している。ここでは、高麗における王位継承問題の発生メカニズムをモンゴル情勢との連動関係に焦点をあてて解明する。

(2) 君臣関係——変化と動揺の構造

事元期にはしばしば君主と一部の臣僚が深刻に対立し、しかも臣僚側がモンゴル側の権力と結びついて君主の権威・権力を侵害する場面も多くみられた。このことは高麗における親モンゴル勢力の跋扈とされてきたが、当時高麗支配層に明瞭な「反モンゴルの」人物は確認できず、モンゴルとの関係の有無自体が政治行動を方向づけたとはいえない。そこでモンゴルとの関係が個人個人の政治行動にあたえた影響の類型とその発動メカニズムを分析し、事元期における君臣関係の様相を解明する。

(3) 官人集団の統御——人事行政と治安機構から

中国唐・宋の制度を範型とする高麗の古典的体制は、12世紀後半より武臣政権の登場という激変期をむかえるが、事元期にいたって「王政復古」をなしとげる。しかし私見では、その後の王権主導の政治運営には武臣政権の手法を踏襲した側面がうかがえ、それはモンゴルの制度との関わりをなかで実現された可能性が高い。ここでは政権運営の要諦として官僚の人事と治安機構に注目し、武臣政権期と事元期の連続性を検証する。これにより、高麗在来の政治潮流とモンゴルからの影響との同調・共鳴現象を明らかにする。

(4) 国王近侍組織——朝鮮前近代国家の「中央ユーラシア的」要素

事元期に帝室の駙馬（娘婿）となりモンゴル王侯の地位を獲得した高麗王は、その特権としてモンゴル風の親衛隊（ケシク）を保有したが、これらは後に内侍・茶房等の在来近侍組織とあわせて成衆愛馬などと汎称されるようになる。由来の異なる二系統の組織が同一範疇のものとして把握された状況に注目し、中国風の王朝という伝統的な説明だけでは捉えきれない高麗王権の品格を抽出する。

3. 研究の方法

効果的・効率的に研究を進めるため、前項(1)～(4)の検討項目は各年次の重点課題としてふりわけた。2015年度は「王位継承問題」、2016年度は「君臣関係」、2017年度は「官僚集団の統御」、2018年度は「国王近侍組織」である。そのうえで4つのテーマにつき、それぞれ文献史料を収集し、事件史・制度史上の事実関係の再構成、モンゴルの政局・制度との関係性、前後の時代との連続性という3つの側面を主に分析した。最も基礎となる史料調査に際しては、原典および実物に即した研究が不十分な高麗史研究の現状に鑑み、国内外の所蔵先・所在地において実物史料にもとづく原典調査を重視した。

(1) 2015年度：王位継承問題

- ①各時期の王位継承問題について事件の詳細を史料網羅的に復元する。
- ②関係者のモンゴル政界との関係性を解明し、モンゴル・高麗双方の連動構造を解明する。
- ③以上の検討にもとづき王位継承問題の発生メカニズムを模式的に把握する。

(2) 2016年度：君臣関係

- ①国王と臣僚の対立例について事例・史料を網羅して事実関係を整理する。
- ②関係者につきモンゴルとのコネクションとその政治行動への影響を解明し、高麗王に対する高麗官人の行動様式を典型的に把握する。
- ③高麗王側の対抗行動とそれが王権の存立基盤に及ぼした影響を分析する。
- ④以上の検討を通じて事元期高麗の君臣関係の特徴を把握する。

(3) 2017年度：官人集団の統御

- ①武臣政権の運営システムを官僚人事と治安機構の掌握という観点を軸に模式化し、その淵源を高麗前期の官僚制度にさかのぼって検証する。
- ②事元期の政治運営における人事行政組織(政房)と治安機構(ケシク、巡軍万戸府)の役割・位相を分析する。
- ③上記について武臣政権からの連続性を明らかにする。

(4) 2018年度：国王近侍組織

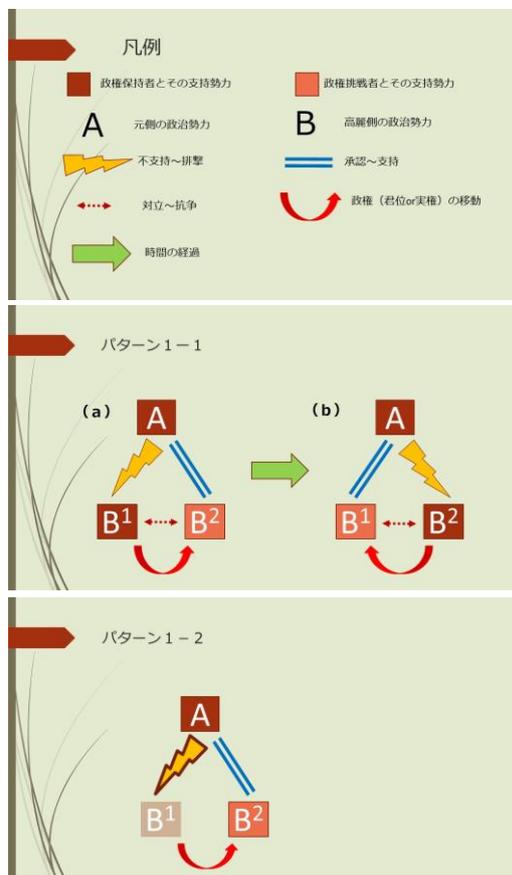
- ①高麗末期に「成衆愛馬」と称された組織の実態を解明する。
- ②高麗前期の内侍・茶房、および事元期以降のケシクが、王権の基盤として果たした機能を比較検討し、その連続性・類似性を検証する。
- ③「中央ユーラシア」型国家に関する近年の議論をふまえ、モンゴル風組織と高麗在来機構が親和性を有することの意味を考察する。

4. 研究成果

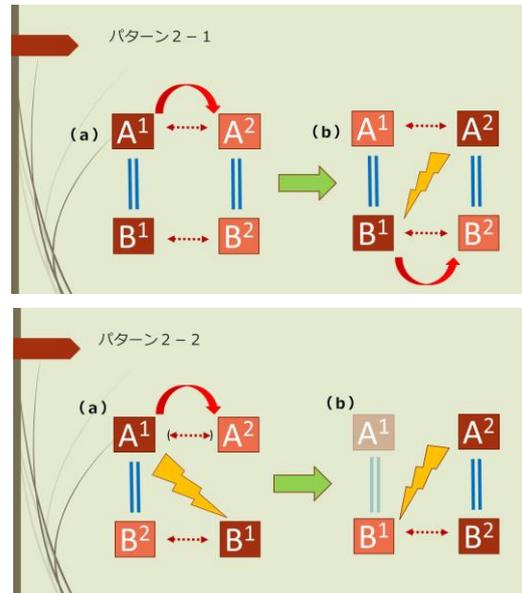
(1) 王位継承問題

王位継承をめぐる深刻な葛藤が発生した忠宣王第一即位期、忠烈王復位期、忠宣王復位期～忠肅王第一即位期初期、忠肅王第一即位期中期、忠恵王第一即位期、忠恵王復位期、忠定王期という時期ごとに、王位継承問題の発生メカニズムを模式的に整理した。その結果、高麗支配層内部の分派傾向に起因しながらも、第一に、元側執権層との関係性に規定されて発現すること。第二に、その関係性のありかた、とりわけ元側における政治勢力間の対立構造の有無によって、形態に大きく2つのパターンがみられることが明らかになった。また各パターンはそれぞれ2つの小パターンに細分できる(右図)。

パターン1は元側の高麗王位承認権者Aが安定している状態で、高麗側関係者Bとの関係が変化することで発生する。小パターン1-1では、高麗側に国王候補B1とB2が併存するなかで(またはB1が政権の座にあるなかで)、元側の承認権者Aの支持がB2に寄せられ、いったんB2の政権が誕生する。しかしその後、Aの支持がB2から離れ、B1が政権を発足(または再発足)させる。小パターン1-2では、元側の承認権者Aの支持を現国王B1が喪失し、B2への政権交替が実現する。ここまでは小パターン1-1と同じだが、B1が直後に死亡したため事態はここで収束するので、小パターン1-1が前半段階で止まった形になる。



パターン2は、元側の承認権者Aの交替にと
もない、これに連動する形で高麗側関係者Bの
立場が変動したものである。小パターン2-1で
は、両国の現政権A1とB1の関係が良好である
なか、まず元でA1からA2へと政権が交替する。
すると、これに連動して、高麗側でもA2と関係
の良好なB2へと政権が移行した。小パターン
2-2では、両国の現君主であるA1とB1の関係
が良好ではなく、A1がB1に対して攻撃を開始
することで、A1と関係が良好なB2へ政権が交
替する可能性が生じる。しかしB2への政権交替
が実現する前に、元側の政権がA2に移行するこ
とで、結果的にB1の地位が保全される。



以上の王位継承問題の要因・背景は、官人社会においてポスト獲得競争が激しさを増すなか（プッシュ要因）、密接化した対元関係が呼び水（プル要因）となって党派対立の構図が生まれ、そして紛争の直接的な引き金がかかれた。このうち対元関係の密接化とは、具体的には両国の人士が直接に接触する機会の醸成であり、王室を中心とする支配層間の血縁関係、およびケシク（親衛隊）・トルガク（質子）としてモンゴル宮廷に近侍する習慣がその中核をなす。これらは両国支配層間の紐帯を強化することを目的とするもので、それ自体に高麗社会を攪乱する意図があったとはいえない。しかし高麗国内社会が内包してきた政治潮流に新たな与件として加味されたとき、それらは紛争のプル要因として作動した。

(2) 君臣関係

事元期に顕著化した君臣関係の動揺、王権の求心力低下現象の構造的要因として、元との政治的統合・融合にともなう、高麗官人社会における君臣関係の自己完結性の喪失があることが明らかになった。具体的には、第一に、それまでの大陸王朝とは異なり、元は高麗の内政に対する介入能力を保持し続けた。そのため、皇帝に代表される元の権力者が、高麗王権を規制する上位ないし対抗権力として実体化していた。第二に、国王の存在を飛び越えて高麗官人と元の権力者とを個別に結びつけるパイプが複線的に成立していた。すなわち、トルガク・ケシク、科挙、宦官としての派遣など多様な契機を通じて高麗官人が元に直接仕官したこと、および婚姻を通じた血縁関係である。このことは、当事者の第二世代以降の子孫をより強固に元に結びつける一方、高麗における君臣関係の相対化を促進した。

かかる状況が、高麗国内のポスト獲得競争の激化と、王位交替の可能性が潜在する状況とも重なりつつ、君臣間のトラブルを誘発した。すなわち、ある高麗官人は、国内において自らの利害に関して、個人として有するコネクションを通じて元側の権力にはたらきかけ、「外から（上から）の圧力」をかけることで、その貫徹をはかることができた。それはしばしば高麗王権の利害に反したわけだが、上位権力たる元が介入する状況下では、王権側が臣僚の動きを制御しきることはできなかった。

一方、高麗における君臣関係の相対化は、個々の官人の生活戦略、人生設計の観点からみた場合、処世の選択肢・可能性の拡大を意味するものでもあった。すなわち自らの利害を追求するうえで国内の政治力学による制約が小さくなり、仮に王権と衝突して国内での立場を悪化させた場合でも、元側の権力者へのはたらきかけによってこれを沈静化させ、少なくとも国外に脱出して直接的な危険を回避することが可能であった。

(3) 官人集団の統御

事元期の高麗王権は、元という上位権力の影響で君臣関係が相対化するなかで、私的武力基盤と、人事権の掌握とを通じて、官人層に対する統制力・求心力を側近集団の形成という形で高めようとした。このような政治運営は、事元期に先だつ武臣政権において、私的人事機構（政房）による人事のコントロール、私兵（都房）や新式部隊（三別抄）による治安維持（反対勢力に対する抑圧）という形で、すで実践されていた。しかも事元期の高麗王は、この手法を継承するうえで、君主の親衛隊であるケシク、治安部隊の巡軍万戸府など、モンゴル由来の制度・組織を利用した。

すなわち事元期の高麗王権は、「王政復古」後も唐・宋制に準拠した旧システムに回帰せず、政房を王宮に接収し、その後ケシクの一職としてピチゲチが導入されると、両者が表裏して運用される様相を呈した。またケシクのうち、少なくともコルチ（弓箭を帯びて君主を警護）、鷹坊（鷹狩り用の猛禽類を調達・管理）などは、国王の私兵として反対勢力への弾圧に投入された。元の巡邏制度にもとづく治安部隊である巡軍万戸府もまた、君主の私的武力装置として反対勢力への抑圧に利用された。このように事元期の高麗王権は、武臣政権のシステムをモンゴルの外被のもとで踏襲したのである。

しかもこの潮流の連続性は、巨視的にはさらに遡り、高麗の官僚制度が前期以来構造的に生み出してきた膨大な官僚予備軍の存在圧に起因するポスト獲得競争を背景としていた。武臣執

権および対モンゴル関係にともなう官人輩出層（武臣・武人、訳官、モンゴル式国王親衛隊、外来者（モンゴル公主の従者（ゲルン＝コウ）など）、下級身分層（賤隷など）など）の拡大は、その熾烈化に拍車をかけた。モンゴルからの影響は、高麗の既存の政治潮流との間に共振現象を引き起こしたのみならず、これを増幅させたものと評価できる。

(4) 国王近侍集団

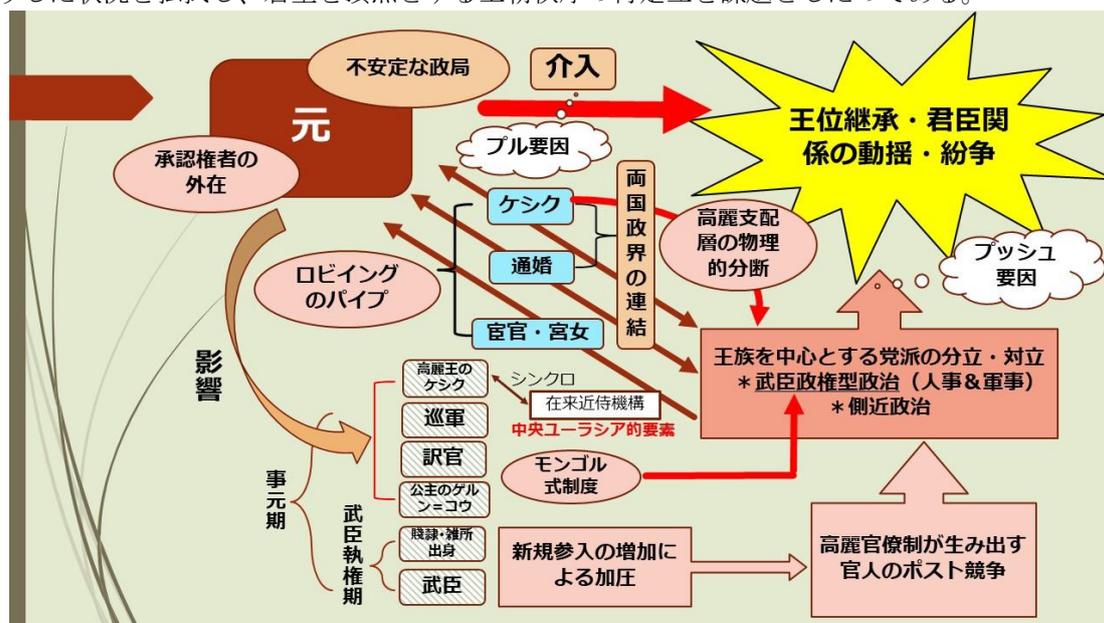
事元期の高麗王はモンゴル式の君主近侍機構ケシクを導入し、これを不安定な王権を支える側近集団として育成した。ケシクの組織は、14世紀後半には、高麗前期以来の近侍組織、内侍・茶房等と一括して「成衆愛馬」などと汎称されるようになった。

そもそも高麗の内侍・茶房は、源流である中国において宦官職だったのとは異なり、文官を中心に門閥子弟や個別の有能者を選抜したエリート側近集団であった。すなわちモンゴルにおいて貴族の子弟を中核として組織されたケシクと類似性をもっていた。高麗在来の制度がもともモンゴルの制度と類似性を有していたため、シンクロ現象を起こしたのである。

こうしたケシク的な近侍組織は、中央ユーラシアの歴代諸王朝に広く確認され、近年そのことを要件の1つとして「中央ユーラシア型」の国家モデルも提起されている。中国唐宋風の官僚制国家と説明されてきた高麗にもまた、こうした「中央ユーラシア的」要素が存在したと評価できる。ただし「中央ユーラシア的」とは、これを地域的・民族的な本質論として述べ、高麗が中央ユーラシア世界の一部であると唱えるものではない。そのようなシステムを胚胎せしめる政治的・社会的環境が中央ユーラシア世界には広く、持続的に生起していたが、それが高麗時代には朝鮮半島にも存在したという意味である。

(5) まとめ

以上のような事元期高麗王権をとりまく政治環境を模式的に図示すると、下図のとおりである。モンゴルからの影響は、高麗が自ら内包する構造的な特質により生起していた政治潮流と共振現象を起こし、かえってこれを増幅させた。それは側近政治・少数専制政治という形で発現し、官人社会における王権の求心力を結果的に低下させた。高麗末・朝鮮初の改革勢力は、こうした状況を払拭し、君主を頂点とする王朝秩序の再定立を課題としたのである。



5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計5件)

- ① 森平雅彦「事元期高麗のケシクと在来近侍機構」九州史学会、福岡：九州大学、2018年12月8日
- ② 森平雅彦「仏への祈りでたどる高麗史」「高麗仏画」展招待講演、東京：根津美術館、2017年3月26日
- ③ 森平雅彦「事元期高麗における王位継承問題の構図」朝鮮学会大会、天理：天理大学、2016年10月2日
- ④ 森平雅彦「韓国史に何を求めるか? : 拙著『モンゴル覇権下の高麗：帝国秩序と王国の対応』をめぐって」ソウル大学校奎章閣韓国学研究院海外著者特講(招待講演)、韓国ソウル：ソウル大学校、2016年3月14日(韓国語)
- ⑤ 森平雅彦「国際関係にみる朝鮮史の醍醐味」神戸女子大史学会招待講演、神戸：神戸女子大学、2015年11月8日

〔図書〕（計1件）

- ①（共著）『世界歴史大系 朝鮮史 1—先史～朝鮮王朝』、李成市・宮嶋博史・糟谷憲一編、山川出版社、2017年、169～287頁（総640頁）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者 なし

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者 なし

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。